

理学療法学 第19巻第6号 603~605頁 (1992年)

## 短 報

## 人工関節再置換後の理学療法のあり方\*

—特に人工股関節全置換術(THR)と人工膝関節全置換術(TKR)を中心に—

川村博文<sup>1)</sup> 鶴見隆正<sup>1)</sup> 辻下守弘<sup>1)</sup> 山本博司<sup>1)</sup>  
 谷俊一<sup>1)</sup> 川上照彦<sup>2)</sup> 横岩正<sup>3)</sup>

## 要旨

人工関節再置換19例(THR 17・TKR 2)を対象として再置換前と1年後の筋力・関節可動域(ROM)・歩行の比較、THR再置換後の脱臼などを中心として調査し、理学療法プログラムとリスク管理の検討を行った。その結果、筋力はTHRで中殿筋は術前のP<sup>-</sup>～G<sup>+</sup>レベルが1年後にはP<sup>-</sup>～F<sup>+</sup>レベルに軽度低下し、TKRでは大腿四頭筋、ハムストリングス共に変化はなかった。ROMはTHR、TKR共に著明な変化はなく、歩行は再置換後、全員T字杖歩行に改善した。THR再置換後の脱臼率は29.4%で股関節の過屈曲が原因であった。理学療法のポイントはTHRでは早期外転装具の装着、中殿筋筋力強化、脱臼予防対策指導などで、TKRは早期のContinuous Passive Motion(CPM)訓練、電気刺激などを行なうことである。

キーワード 再置換、THR、TKR

## はじめに

人工関節置換術は目覚しい発展を遂げたがその一方で長い年数を経るに従い術部感染、人工関節の弛みなどの合併症が表面化し、これに対する再置換が増加する傾向にある。

そこで、今回、我々は当院で人工股関節全置換術(以下THR)、人工膝関節全置換術(以下TKR)などを行なった患者の中で再置換例となった者を対象にして、その理学療法プログラムのあり方とリスク管理を中心

検討を加え興味ある知見を得たので報告する。

## 対象・方法

1981年から1990年までにTHRとTKRを行ない、1年間以上follow upした344例(THR:200例、TKR:144例)中、再置換例THR 17例17関節(8.5%)、平均年齢65歳、女16・男1)とTKR 2例2関節(1.4%)、平均年齢68歳、女2)の合計19例19関節を対象とした。この対象から「初回置換・再置換の原因」、「初回置換と再置換に用いた人工関節の種類」、「初回置換から再置換までの期間」、「再置換前と1年後の筋力・関節可動域(以下ROM)・歩行能力」、「THR再置換後の脱臼」、「日整会の変形性股関節症判定基準に基づくTHR再置換前後の比較」、「三大学膝関節機能評価表に基づくTKR再置換前後の比較」などを中心としてretrospectiveに調査した。

## 結 果

初回置換の原因疾患は、THRでは全例、変形性股関節症であり、TKRでは変形性膝関節症であった。再置

\* Physical Therapy of Revision Total Hip and Knee Replacement Arthroplasty

<sup>1)</sup>高知医科大学附属病院 理学療法部

Hiromu Kawamura, RPT, Takamasa Tsurumi, RPT, Morihiko Tsujisita, RPT, Hiroshi Yamamoto, MD, Toshiyuki Tani, MD : Department of Physical Therapy, Kochi Medical School Hospital

<sup>2)</sup>高知医科大学 整形外科

Teruhiko Kawakami, MD : Department of Orthopedic Surgery, Kochi Medical School

<sup>3)</sup>海里マリン病院 理学療法科

Tadashi Yokoiwa, RPT : Department of Physical Therapy, Misato Marine Hospital

(受付日 1992年4月13日/受理日 1992年4月30日)

換の原因は THR の場合、人工関節の弛みが 17 例中 13 例 (76.5%), 術部の感染が 4 例 (23.5%) であり、TKR の 2 例の場合では人工関節の弛みと術部の感染が各 1 例ずつであった。

初回置換に用いた人工関節は THR が Charnley type with cement, TKR が ceramics without cement であり再置換に用いた人工関節は、THR が Harris-Gallante type without cement, TKR が Miller-Gallante type without cement であった。

初回置換から再置換までの期間は THR が平均 7 年 2 ヶ月 (8 ヶ月から 15 年 1 ヶ月), TKR は平均 8 ヶ月 (4 ヶ月から 1 年) であった。

再置換前と再置換術後 1 年後の筋力を比較すると THR の場合、中殿筋は術前が P<sup>-</sup>～G<sup>+</sup> レベルで、再置換術後 1 年後は P<sup>-</sup>～F<sup>+</sup> レベルであり、大腿四頭筋は術前が F～G<sup>+</sup> レベルで、再置換術後 1 年後は F～G<sup>+</sup> レベルであった。また、TKR の場合、大腿四頭筋は術前が P<sup>+</sup>～G<sup>-</sup> レベルで、再置換術後 1 年後は P<sup>+</sup>～G<sup>-</sup> レベルであり、ハムストリングスは術前が F～F<sup>+</sup> レベルで、再置換術後 1 年後は F<sup>+</sup>～G<sup>-</sup> レベルであった。

再置換前と再置換術後 1 年後の ROM は、THR の場合、股関節屈曲は術前が平均 78.3° ± 15.2° (60°～120°) で再置換術後 1 年後は平均 86.3° ± 12.0° (70°～100°) であり、外転は術前が平均 27.7° ± 8.5° (10°～40°) で再置換術後 1 年後は平均 32.3° ± 7.9° (20°～45°) で、伸展は術前が平均 10.0° ± 14.1° (0°～20°) で再置換術後 1 年後は平均 15.0° ± 7.1° (10°～20°) であった。TKR の場合、膝関節屈曲は術前が平均 82.5° ± 10.6° (75°～95°) で再置換術後 1 年後は平均 95.0° ± 0° であり、伸展は術前が平均 -2.5° ± 3.5° (0°～5°) で再置換術後 1 年後は平均 -2.5° ± 3.5° (0°～5°) であった。

再置換前と再置換術後 1 年後の歩行能力を比較すると、THR, TKR 共に術前が 2 本松葉杖歩行で、再置換術後 1 年後は 1 本松葉杖または T 字杖歩行を獲得していた。

さて、17 例の THR 再置換術後に脱臼を生じた者は 5 例 (29.4%) であり、その脱臼方向は後方脱臼 4 例、前方脱臼 1 例であった。脱臼原因是股関節の ROM 訓練中に 2 例発生しており、その 1 例は PT による他動的 ROM 訓練で股屈曲 45° 位で生じ、もう一例は病棟でのブーリーを用いた自主訓練中、股屈曲 80° 位で脱臼を生じた。また、端坐位の姿勢で物を取ろうと体幹を前屈した際に 90°～120° の股関節屈曲位で脱臼を生じたものが 3 例であった。脱臼時期は、THR 再置換から平均 7 週 (3～

14 週) 後であり再置換後 3～6 週に集中していた。

日整会の股関節判定基準に沿って THR 再置換前後を比較すると術前は平均 49.0 点、再置換術後 1 年後は平均 77.1 点に改善していた。特に疼痛、歩行能力、日常生活動作 (以下 ADL) において改善が見られた。

三大学膝関節機能評価表に基づき TKR 再置換前後の比較を行なうと、術前は平均 48.0 点であり、再置換術後 1 年後は 63.5 点と改善していた。特に、疼痛、膝屈曲 ROM、歩行能力において改善が見られた。

## 考 察

調査の結果、THR 再置換後は日整会の変股症判定基準において改善傾向 (主に疼痛、歩行能力、ADL) があるにもかかわらず、再置換前と比較して軽度の中殿筋の筋力低下がみられた。

中殿筋の筋力低下は初回置換、再置換と 2 度に及ぶ手術により中殿筋に大きな侵襲が加わるため筋力の回復には限界があるものと思われる。したがって、中殿筋や股関節周囲筋は再置換後は再置換前の筋力よりも弱化する可能性があることを十分に考慮して早期からベッドサイドでの中殿筋への電気刺激による筋力強化や等尺性筋力増強訓練などを積極的に行なうことが必要であろう。また、THR 再置換後の脱臼発生頻度は 29.4% と以外に多く、その直接の原因是股関節の過度な屈曲であり、2 度の股関節への手術侵襲が招く筋力低下と筋肉以外の股関節周囲軟部組織の緊張低下による股関節の不安定性も脱臼に関与しているものと考えられる (表 1)。

今回、人工関節周囲の軟部組織の修復が完成しつつある術後 3～6 週に脱臼が集中していたことからも THR 再置換後の理学療法のポイントとしては術後早期から股関節外転装具を装着した上で、上述の筋力増強訓練を重点的に行ない、さらに 40 cm 以下の低い椅子坐位の禁止や股関節を 90° 以上過度に屈曲しないよう ADL 指導を行ない、リスク管理を徹底化することで脱臼予防対策

表 1 中殿筋の筋力低下と股関節脱臼のメカニズム

- THR 初回・再置換の 2 度の手術侵襲 → 中殿筋  
↓ 筋力の回復に限界  
解剖学的な機能の温存
- THR 再置換後の脱臼発生率 : 29.4%
- 発生機転 : 股関節の過度な屈曲
- 発生要因 : 2 度の手術侵襲が招く筋力低下 →  
股関節周囲軟部組織の緊張低下 →  
股関節の不安定性 → 脱臼

表2 THR再置換後の理学療法のポイント

・再置換後 3～6週：	・bed 上で股関節外転装具の装着（股関節軸の安定化） ・中殿筋の電気刺激、等尺性筋力増強訓練を積極的に
・再置換後 2～3ヶ月：	・坐位、立位、歩行で外転装具の装着を励行 ・風呂、洋式トイレでのA D L指導（脱臼予防対策） —40cm以下の低い椅子坐位の禁止 股関節90°以上の屈曲禁止

を図ることが重要である。また、ROM訓練に関しては軟部組織の修復が完成し、脱臼の危険性がなくなる再置換後3ヶ月までは積極的なROM訓練は行なわず、むしろ坐位、立位、歩行といった各動作をとうしてのROM維持に重点をおくべきである（表2）。

TKR再置換後は、三大学膝関節機能評価表において再置換1年後は術前と比べて、特に疼痛、膝屈曲ROM、

歩行能力で改善していたが、大腿四頭筋の筋力は維持したに留まった。術後早期のベッドサイドでのContinuous Passive Motion (CPM) 訓練、大腿四頭筋の電気刺激やキック板を用いた筋力増強訓練などを行なうことが重要であろう。

本稿の要旨は第26回日本理学療法士学会にて発表した。

## 参考文献

- 1) 神先秀人・他：THR術後脱臼に関する調査。国立大学理学療法士学会誌 10：39～42, 1988.
- 2) 浅井富明・他：人工股関節再置換術の適応と問題点。別冊整形外科 16：24～29, 1989.
- 3) 広瀬 熱：人工股関節の再置換術の合併症ならびにその対策。別冊整形外科 16：108～113, 1989.
- 4) 衛藤義人・他：膝関節全置換術後の再置換術について。関節の外科 12：161～165, 1985.
- 5) 浅井富明・他：人工関節置換術後感染症。骨・関節・靭帯 3：53～60, 1990.
- 6) 小岩政仁・他：人工膝関節全置換術後のsurvival rate。別冊整形外科 16：194～198, 1989.
- 7) 鶴見隆正：理学療法プログラムの立てかた。PTジャーナル 24：31～36, 1990.
- 8) 辻下守弘・他：Continuous Passive Motion (CPM) の原理と治療効果。PTジャーナル 23：243～249, 1989.